

おおやまと

大倭出版局・大倭紫陽花邑

令和5(2023)年
6月号

通巻634号
毎月23日発行

(題字 矢追日聖)

★発行日 令和5年6月23日
★発行所 大倭出版局
〒631-0042 奈良市大倭町1の12
☎(0742)45-1192
★印刷 大倭印刷製本
★定価 1部 300円
年間購読料3,500円(送料共)
★郵便振替 01050-6-67002
大倭出版局
URL <http://www.ohyamato.jp>



首里金城の大アカギ 福井市 齋藤正宏さん(文・6頁)

再録 昭和46(1971)年6月23日発行『すさのお』第57号より

こんな場合もある ～憑依霊の一面～ (二)

法主 矢追日聖 (満59歳)

世間では霊的感応をもつ人が多い。いわゆる新興宗教の教祖やおがみ屋、神憑りなどと称する人々の殆どがこの類である。
子細に見るならば、同種の者は絶対にはない。その人それぞれの特質を備えている。ひどい者になると脳機能の障害からくる幻覚幻聴を神聖な御神示と受け取ったり、また自己暗示から反射的に起こる色々な現象を、総て御宣託と錯覚して信者に強要したりする者もある。

現代宗教の盲点

困ったことだが、この心霊界の事柄は客観性がないために、つまり実証的裏付けが乏しいために一般社会人から見れば無視できない恐ろしい未知の世界である。にも拘わらず現代ではこれらを宗教として公認している。

それに乗じて、彼らは己れが指示する出鱈目な事柄でも、神のお告げと称する楯の陰から絶対性を押し付けるといふ非道極まる行為を取ってやっているのである。入信したために不幸に陥り私のもとへ助けを求め縋ってきた多くの人々が、その間の事情を明らかに教えてくれる。

彼らは心霊的生活相談所の最高責任者、あるいは心霊治療者であって、いわゆる易・鍼灸・医療・墓相・占いなどを行う人々と同列に看做して当然と私は言いたいのである。

現代宗教の在り方について、ここで一考を要する大きな盲点が横たわっている

のではなからうかと私は思うのである。

千代さんの体質は「おがみ屋」としては申し分のない諸条件を具備している。憑かっている間は、完全に彼女の現在意識は眠っているの、本人は何をしたのか、何を言ったのか、我に戻った時には全然記憶がないと言うのである。

一応あらまし、千代さんから彼女の生活環境や人間関係、それに不動さんの信仰をきっかけにして起こったあらゆる苦悩も大体理解できたし、不動さんの実体も把んだし、時間もかなり経過した。もうこの辺で千代さんにその不動さんを憑かせてもよいと思ったので、機を見て逃げまどう不動さんを電光石火に引き出したのである。

途端に正座して今の今まで話していた千代さんは、唸りを発して四十五度背後へそくり返り、天井向けに両手を合わせ、呼吸アラアラしく緊張した憤りの態度を示す。

ここで一言つけ加えておきたいことは、「憑依霊を引き出した」と至極簡単に記述したが、これは正直な表現である。世間並ならば、法力・行力・経力・結印・息吹・気合など、誠に大袈裟な方法を修して憑依させるのであるが、私の場合はこれらとは逆の方法になる。簡単に言うならばタバコを吹かしながら対談の状態、機を見て引き出すのである。恐らくこの世界の人々なら大法螺吹きと嘲り笑うのが落ちであろうと思う。

私はもともとサニワ(齋庭・審神者)なんて性に合わないのであるが、時たませざるを得ない機会に遭遇することが起こる。千代さんの場合もこの例に漏れないのである。

憑依された千代さんは、無意識状態になっているので、憑依霊は千代さんの物体(身体)を思う存分に駆使するのである。

憑依霊と話しする

敵めしい気を漲らせる不動明王の姿をとり、印を結んだ手を震るわせ、声を抑さえておもむろに、「わしは、邪穴院(仮名)の御本尊……不動明王……」と第一声、名乗りを上げた。

「ホホ……おみごと、大したしろものだ。化かすも堂に入ったもんだ……その手口でお前は、邪穴院の行者や、多くの信者達を籠絡してきたんだなア。とんでもない邪霊だ」

「わしは、真面目に修行を積んできた杉坂(仮名・行者)を見込んで人助けをしている不動明王である……信者をふやし、賽銭が上がるほど杉坂は喜んで、わしの霊験御利益を説教する……信者達は有難い不動さんやと信じて一生懸命に拜んでくれるんや。こんなお互いによいこと、一体どこが悪いと言うのか」

「騙すのもほどほどにせえ、このウヌボレ者めが……お前に神通力があるなら、お前の相手(サニワ)を見よ。そこに出ている尻尾は何だ。正体をお前の口からはつきり言え」と言い放って私はその憑依霊を念波で締め上げた。

「苦しい……解りました解りました、許して下さい。もう騙しません、ほんとのことを申し上げます。嘘は言いません」

千代さんは今にも心臓が止まりそうな苦情を訴えているので、少し気をゆるめてやれば大きく呼吸をして頭を垂れ鎮まり返った。観念したのか合わせていた両手をガックリと膝の上に落として、眩くように低音で言う。

「いやだなア……永い年月の間、わしの正体を見破った行者はいなかったが……恥ずかしいこと

や……杉坂やわしの眷族らがこれを知ったら、わしはもうおしまいだ。いやだけど逃げられやせんし……縛られているからな」

「何をブツブツ独り言を言っているのか。名古屋へは帰さんぞ……いつまでもこの恐ろしい大倭で縛りつけておこうか……よいなア」

「お許し下さい……いやだなア、言わなきゃなるまいし……わしの正体はなア……三十年前から杉坂についている……ふる……夕ヌキや」と言いながら頭を下げ、背を前に丸めて神妙に恥じらいを表わす。

頭を上げて再び喋り出す。

「不覚だった……こんな恐ろしい大倭があったとは……知らなんだ……知らなんだ……いやだなア……川田さんが大倭へ行きたいと言った時、一寸覗いてみて恐ろしい所とはうすうす分かっていたので、できる限り川田さんを行かせまいと邪魔したのだが……川田さんは死んでも詣ると強情をはり、途中で死ぬかもしれないと思ひ介護人の女を連れて、とうとう無事にかけつけよった。

わしとは切っても切れない縁があるので、あの手この手と邪魔しながらついて来たが……このごまだ……。えらい所に来やがったもんだ」

「お前は何の訳あって、そんなにしつこく川田さんを苦しめたりいびったりするのか。聞こうじやないか、言ってみよう」

「川田さんは数年前、かなり苦しんで杉坂の所へ来た。見ると行者にすれば金持の縁者が信者に引っぱり込めると思い、あれこれとお告げをした。初めのうちは有難い不動さんのお指図と信じて、知らせた通り賽銭も所定の所へ供えたり足も運んだ。これはうまくいったと思って、次々川田さんの縁故者を信者に引き入れ、賽銭を運ばせるお告

げをするようになると、川田さんは神さんとはこんな強欲ななんか。どうもおかしいと考えるようになった。

それからが言うことを聞かなくなったので……わしは、どうあっても川田さんを行者にする、ならなければ命をとるぞ……と嚇しても、川田さんは行者はいやだと言う。腹が立って、わしの力の限りいじめることにした……川田さんは、そのたびに御先祖さん御先祖さんと拝みやがる。これがまた腹が立つ……殺そうとしても、川田さんは助かる。何かしら川田さんには命を守っている何かがある。どうも分からない……。

一番頼なのは、障る神があれば、必ず助けてくれる神が何処かにござるはず。いつかはお導き下さるだろう……と言いやがる」

「よかったなアー大倭に来て……川田さんの方がお前より正しいよ。お前は神の道が分かっている。杉坂と縁を切れ。でないとお前もろとも地獄の責め苦にあうぞ……お前は哀れにも座もなく浮浪者だから、幽界にいながら加美の摂理に基づく霊界を知らないんだ。分かっておればこんな善良な人間を苦しめるはずがない。それに対する神罰の恐ろしさを知らないからだ」

「わしは不動さんに納まって、神さん神さんと拜んでもらうのが何よりの楽しみなんだがなアー。杉坂と別れようか……どうしよう……杉坂は少々の貯金はあるが、縁を切るとこれから先がどうしてやっていくかなア……今日まで拜んでくれた義理もあるし……」

「そのことはゆっくり考えよ。行者とはきつぱり縁を切って、今日まで苦しめたその罪ほろぼしに川田さんを守護せよ。そして共に修行して霊界人の仲間入りできるようになアー。今日は初めだ

からこの辺で許してやる。名古屋へ帰してやるが、川田さんを苦しめてはならないぞ。お前はしつこいから必ずいたずらするだろうが……次回を待ってよ」

不動さんは喜んで早々に千代さんから抜け出した。と同時に、千代さんはそのまま仰向けにバタンと倒れ、硬直し、口から泡をふく、呼吸は悪臭

あと足あと

2023年春

続・伊良部島の旅より

兵庫県明石市 水島 照美

を放つ。数分たってからようやく意識が戻ったのである。
二時間余り経過したので千代さんはかなり疲れたと思うが、彼女は何も知らない。終始側にいた家の子や来客数人は狐にでもつままれた様子だった。(つづく)
昭和四十六年六月十五日、日聖記

◆鍋底で

しばらくして、水から上がるとお腹の底からすごい勢いで込み上げるものがあり歌いたくなりました。鍋底の深いところに集中して。背負ってきたウクレレを弾きながら「明日世界が終わっても今日は花の種をまこう」と歌う私の背中を、娘がタオルで拭いてくれたりさすってくれたり、まるで娘が母みたいでした。

風の神の岩に感謝を伝え、火の神の場所へ登ると夕日が差して、冷えた体を暖かいベールで包まれたような体感があって、娘は思わずお日さまに手を合わせて「ありがとう、あたたかい」と言いました。

同じ道に戻りましたが、おそろおそろの行きとは違い、娘の顔は別人で、崖を登るのも大人よりも上手になり、喜びと自信が溢れていました。

私と娘2人ではこのような体験はできなかつたと思います。旅の仲間が一緒にいて、見守る目がたくさんあったので、娘も私も心折れることなく、心荒げることもなく、今できる力を出せました。とてもありがたいことでした。

鍋底から戻り、みんなで夜ご飯と一緒に食べながらの話は、タイムスリップして40年前の学生時代の恋の話や(恋バナに目覚め始めた娘の目がキラキラしていました)、サークル活動の話、近況報告など盛りだくさん。

一緒にした方の1人が「大倭紫陽花邑を卒論テーマにしました」と話されてびっくり仰天。「気流の鳴る音」(真木悠介)に感銘を受けたことがきっかけだったのだそうです。伊良部島に来て大倭の話になるとは思っていませんでした。

翌日、近角さんの職場に伺った時、本棚に『気流の鳴る音』がありました。私はまだ読んだことがないので、手に取ると、知っている人の名前や場所が出てきてうれしくなりました。

ふと開いたページには、石牟礼道子さんの気持ちを想像して真木悠介さんが書いた文章があり、その一文に目が止まりました。

『私たちすべて、やがて死すべき者として、ここに今出会っているというこのふしぎさ、いとおしさ』

いつからかは分からないけれど、私はこういう気持ちで人と出会い、出会いたくて歌いながら旅

をしていましたが、言葉にならずにいました。それを本の中に見つけて、言葉として出会いました。

◆ミルク浜のこと

目の前に広がる美しい白砂の浜。その向こうに海が遠くまで続いています。ミルク浜と呼ばれる200メートルの浜を歩いていくと、ミルク御嶽という自然の洞窟があります。昔から祈りの場、感謝の場として大切にされている大自然の神様です。(※ミルク川みろくがなまったと言われる)

旅先で、地元に住む方のご案内で縁ある様々な場所の大自然の神様に会いに行かれることはとてもうれしいです。

今回も近角さんにミルク御嶽に案内して頂くことになってウキウキ歩いて行ったのですが、「あれ?」「えええ……う」。ここは倉庫です!というような感じに、ビニールボートと椅子や机が御嶽の中に取まっていました。

おそらく、軽い気持ちで、荷物を入れてしまったのでしよう。ミルク御嶽という聖地であることも知らない人なのでしょう。

荷物が入っていることを知ってる人も他にいないのでしようけど、どうしたらいいか何もできないまま放置されているようでした。私たちも気づいたものの、誰かが置いたものを勝手に動かすのはいけないことのような気がして、立ちつくしながらしばらく眺めていました。

仕方なく私は荷物の隙間に体を挟むようにして、洞窟の中に向かって語りかけてみました。胸が詰まってきて、「ほんとにすみません。スミマセン。ごめんなさい」。そればかり祝詞のように繰り返していました。

そんな私の様子に娘はちっとも驚かず、私と背中合わせに海に向かって腕を広げて立ち、踊った

り、何やら大声で話しかけたりしていて、まるで大きな舞台のピン女優ごっこのように、海に遊んでもらっていました。

近角さんが「他の場所に案内したらよかったなあ」と、せっかくなから来た私たちのことを思っただけで言ってくれましたが、「ここに来るために、今回は伊良部島に来たのかもしれないって思います」と答えました。

「ちよっと動かしてみようか?」。ミルク御嶽が海に開かれるようにボートを少しずらしたら、風が通り始めました。もう途中でやめることはできなくなり、力を合わせて思い切りボートを引き出しました。美しい大自然の洞窟が姿を表しました。

娘が「わー、こんなふうになっているの」と声を上げながら走り寄って洞窟に入ろうとしたので、「ここは神様のおうちだから、外からご挨拶しよう」と、二人で入口に座って声を出してみました。めんどくさそうに半分目を開けながら寝たふりしている何かに、「こんにちわー」「ごめんださーい」と言うように。

その後は遠慮なく思うまま、『照美と遥香のおしかけライブ in ミルク御嶽』。もう分かったからと、呆れ顔で苦笑いされるくらい、大自然の神様に歌いました。

そのそばで、娘は歌に合わせて砂でお絵描きをしたり、時々一緒に歌ったり、縦笛で「パフ」を吹いたりして、すっかり親戚の家に遊びに来ているように寛いでいました。

そのように過ごしながら落ち着いた後、「それで、これどうしようか?」とボートを眺めて近角さんが言いました。

「元に戻す?」「落とし物ありますって届けるとかどうでしょう」「なるほど、落とし物拾ったからお巡りに届けるよねえ」「せめて、ミルク

▼ボートをどかした後の清々しい顔とミルク御嶽



▶ミルク御嶽

御嶽じゃない隣の洞窟に移動させようか?」でも誰かが置いた荷物を、勝手に他の場所に動かすのっていいのかなあ」「うん。置いてはいい場所置いてはいいのだから、どけてもいいのかなあ」「でも、置いてはいい場所って書いてないからなあ」「でも、何も書いていないから洞窟に物を置いていいわけないし」

何だか分からなくなってきました。でも、このままにして置けないということになって、娘も加わり3人でボートを動かしました。重たいボートでしたが、目に見えない何かも動かしているような気持ちでした。

ミルク御嶽が何の邪魔もなく海を眺められるようになりしました。当たり前前の場所に、当たり前前にある美しさは、実はとてもありがたいことなんだと思えました。

◆ハーブペラ畑の事業所で

NPO法人いらいうゆう「伊良部島ハーブペラ畑」は、近角さんが仲間たちと大切に作っている場です。森につながる広い畑と作業場があり、就労継

続支援B型事業所の指定を受けています。

朝の会で私と娘を紹介してくださり、作業前のみなさんの前でウクレレを弾きながら歌うと、見えない糸がシュルシュルと伸びていつて心と心を通じ、お互いの垣根がなくなる感じがしました。

「会いたくてきちゃったよ」「明日世界が終わっても今日は花の種をまこうよ」と、思っていることをそのまま歌いました。言葉で自己紹介するよりも分かり合えた気がしました。

私と娘は、利用者さんが作業で使うハーブを摘んだり、森の中に入って、畑にすぎ込むための枯れ葉や、土着菌や腐葉土を運ぶ作業を一緒にさせてもらいました。

娘はすぐに馴染んで見様見真似で、ローゼルの種取りとバタフライピーの乾燥、月桃の葉を使った枕製作の材料作りなどの作業もしました。同じ作業をしている利用者の方々は、大ベテランで、手元を覗かせてもらおうと、月桃の葉の刻み方やさばき方がとても美しく、芸術作品のようです。

昼の食事を担当している利用者さんは、スタッフと協力して毎日20人分くらいのご飯作りをしています。自分のできること、得意なこと、コミットして、みんなに感謝されている場でした。

この日はお給料日で、近角さんはお給料を手渡ししながら一人一人とゆっくり時間をとって話していました。娘にとっては、お給料を受け取る様子を見るのは、生まれて初めてのことでした。数字ではなく、ねぎらいと感謝の言葉と共にお給料が渡されることを丸ごと感じる豊かな体験でした。

◆在宅支援にお供して

事業所での体験のあと、さまざまな事情で仕事に来られない方々の在宅支援のお供をさせてもら

えることになりました。給食と、家で作業を進めるための材料(月桃やローズマリー)を持って訪問します。娘は材料を持つ係、私は歌う係になりました。

「照美さん、みなさんに歌を届けてください。何を歌うかは、その場の空気で決めてください」うれしいという気持ちと共に、少し不安もありました。私や娘と一緒に歌うことを、どう思うかな。私が歌うことどう思うかな。

最初に訪問した方は、私と娘を見て「？」という表情を一瞬されたけれど、近角さんが私を紹介してくれると体の向きを変えて聴く準備をしてくれました。

「あなたに会いたくて、会いたくてきちゃったよ」と歌い出したらお互いの目が合って、目の奥と目の奥が繋がった感じがしました。私も、聴いてくださる方もウサギのようにじんわり薄桃色の目になって、歌い終えるとありがたいとお互いにお礼を言いました。何とも言えない、やさしい時間が続きました。

「沖繩はいいでしょう？」「はい、いいですね」「暖かくていいでしょう？」「はい、本当に暖かくて大好きです」「旅行で来たの？」「はい、そうです」「家族旅行？お父さんは今日どうしたの？」「一人で来ました。夫はこの子が小さい頃にもう亡くなったので」「そうだったの。沖繩に來なさい。食べ物何でもあるよ。あっちの丘に行けば、バナナもなってるし、パイヤもあるし困らんよ」

そういう会話はとても幸せでした。その後の訪問でも、それぞれの方にその時私が思う歌を届けに行きました。

体調が悪くて起きることができないという方の家で、玄関から壁を伝うように歌がやさしく届い

たらいいなと思いつながら歌うと、しばらくして笑顔で玄関まで来てくださり、また会いましょうと手を振って家を後にしました。

思えば、会場に歌を聴きに來ることができない方のところへ、歌を届けに行きたいというのは随分前からの私の夢で、その夢が実現しているのだと気づいて、とてもうれしくなりました。これは近角さんとみなさんとの間の信頼関係があるから生まれたことで、私一人が行ってできたことではなかったかもしれません。

歌を届けている時、世の中のために今「はたらいている」という実感が込み上げてきて、この先の人生は自分の力を発揮して思う存分はたらかしたいと思いました。

◆おわりに

伊良部島での出来事のほんの一部を書きました。たくさんのお出来事があり、私も娘も心のひだひだの隅々までふるわせるように感動したり、笑いしました。お会いした時に続きはお話しますね。旅人になると何もかもありがたくて、おにぎり一つがありがたくて、自分たちもできることを惜しみなく差し出したくなります。旅している時間は無限ではないと分かっているの、一つ一つが愛おしいです。

これからも、二人で旅人になり、歌いながら出会の旅を続けていきたいと思っています。小学校は夏休み、冬休み、春休みと長いお休みがあります。どこに行こうかな。おすすめの場所を教えてください。旅においでーという誘いもうれしいです。

最後に、今回の旅で一番たくさん歌った歌を紹介いたします。昨年夏に作った曲です。いつか一緒に歌いたいです。

明日世界が終わっても、

今日は花の種をまこう。

引き出しの中にしまっておいた花の種
まだ芽は出るかな／土においた
かたい殻をほら脱いだ

やわらかなあなた／グリーン

もう一度いのちは始まるよ／おかえりおかえり
明日世界が終わっても／今日は花の種をまこう
目を覚ます時はいつなのかを

宇宙に委ねて／今ここにいるの／みんな
大地に降りて

おてんとさま探すの／あなた／グリーン
何度でもいのちは始まるよ／おかえりおかえり
明日世界が終わっても／今日は花の種をまこう

私と大倭

——暮らしの中で活きているもの

奈良市 伏 浦 和 美

私の記憶では、田舎（京都府相楽郡・現木津川市加茂町）から大倭紫陽花邑へ家族で引越したのは、昭和44年12月。父山崎栄三郎は52歳、プロック製作所で勤務。母貞子は40歳、大倭安宿苑特養老人ホーム長曾根寮の寮母として勤務していました。妹は中学生、私は20歳で郵便局に勤務。大倭の隣保家族として、講堂に隣接した宿舎に住みました。私は、大倭で開催される行事、文化行事や親会へは自然と参加するようになりました。（澤口）志な母さんが住まわれていた部屋でお茶をよばれたり、見るもの聞くものが新鮮で、いままでの生活では知らなかったことばかりでした。相互扶助の精神で、専門家からは、「共同体」と言わ

れてきましたが、私には、子どもから高齢者まで核家族と一緒に生活する大家族と思われました。

大倭では、毎月1回、親会が行われていました。

出席すると、法主様や鈴月母さんにも会えたり、参加されている皆さんの話が聞けました。親はまがつみをととり、より自然なものに戻りたいと願っていた一つの方法だとも知りました。私は、みんなの話を聞いていることが多かったですが、日常生活の中でもややもやして悩むことがあると、親会で話されていたことを思い出し、こんな時はこうすればいいのやと前へ進むこともできました。霊界の話も聞きましたが、私には、否定も肯定もなくそういう世界もあるのやと感じました。自分のことは、なかなか話せず親しているとは思えませんでした。その場の居心地は良かったです。そして8年近く大倭で過ごし結婚を機に親会も遠のきました。

また、73年の歳月は、私に喜びや悲しみなどいろいろ与えてくれました。山崎の両親を見送り、3年前には料理人をしていた弟を亡くし、一番辛くて悔しかったのは、長男が17年前交通事故で逝った時で、23歳の若者でした。みんなを供養するのがどうも私の役のようです。

法主様のお話で、「神ながら」「無計画の計画」は、私の中で生きる指針になっています。自分勝手な解釈かもしれませんが、不思議と腑に落ちます。一生懸命取り組んで努力しても、自分ではどうすることもできない時は、受け入れる寛容さが生まれます。そして「自分らしく生きる」が今までの生き方です。これからも変わらぬと思います。

その時期がきたのでしょうか、今回大倭会に入会しました。どうぞよろしくお願いいたします。仲良くしてください。

表紙写真について

首里金城の大アカギ

福井市 齋 藤 正 宏

清国と朝貢貿易を行っていた琉球王朝は、那覇港から首里城へと至る街道を琉球石灰岩で敷き詰めた。その白く輝く道は真珠道と呼ばれていたという。首里城は、その栄華ともども米軍の艦砲射撃によって灰燼に帰したが、その戦火を生き延びたとされる樹齢200年超えのご神木が残っている。

200年前の琉球国は、清国との貿易を続けており、外交上は独立国であった。しかし実態は直轄地として薩摩藩の支配下にあり、自治権は失われていた。その50年後、明治政府は琉球国を廃し、沖縄県として日本に組み入れた。以来、日本軍が本土防衛の盾と考えた太平洋戦争の時代から、朝鮮戦争やベトナム戦争の補給基地化が進められた米軍統治の時代を経て、内地資本による乱開発が続く現代に至るまで、人問たちの繰り広げる一連の騒ぎを、この大アカギはじっと見てきたに違いない。

嘉手納基地周辺の約45万人分の水道が、米軍の使用する泡消火剤由来と思しきPFAS（ピーフアス）に汚染されているという話は、東京の多摩川地区にある横田基地周辺住民の血液汚染にまで飛び火したことで、「遠い島の他人事」という私たちの思い込みを露呈させている。

「平和の最大の敵は無関心。戦争の最大の友も無関心」（阿波根昌鴻）である。

台湾をめぐる日米中の思惑が再びきな臭さを帯びてきている今こそ、時の流れを見通すまなざしを保ちたいものである。

寸 莎

第150回

矢追 明孝さん
はるたか



感謝をこめて

今回の寸莎は150回の節目に当たるが、大倭生まれで子供の頃に元氣印で知られていて、現在は大倭安宿苑の救護施設・須加宮寮で施設長を務めている矢追明孝さんに登場してもらおうことにした。筆者も久しぶりにゆっくり話しができて楽しい取材の一時を過ごすことができた。

明孝さんは昭和42年3月23日に、矢追義男さんと美壽紀さん（現大倭安宿苑理事長）の間の次男として紫陽花邑の自宅で誕生した。法主様は祖父にあたり、両親は福祉施設の仕事を多忙のため、兄の明昌さんと共に法主宅の瑞光院に預けられることが多かった。だが、「瑞光院の茶の間にはいつも大勢の人が訪ねてきていて、法主さんが自分の『おじいちゃん』であるという感じは全くなかった」という。「法主さんには嫌と

してよく叱られたが、『靈感は持たない方がいい。持つとかえってしんどい』と語った法主さんの言葉が耳の底に残っている」と思い出す。

子供時代には大倭の障害者の施設である菅原園などには自由に入出入りして、重度の身体障害を抱える利用者と接することが多かった。「FさんWさんなどみんな友達としてつき合ってくれて、お互いに差別感など全くなかったし、その思いは今でも変わらない」と語る。それに「紫陽花邑の中にも世間の目から見ると『変わった人』が色々いて、それをごく自然なものとして受けとめていたので、かえって外部の世間には違和感があって溶け込みにくい面があったかも知れない」と分析する。

大倭子供会で毎年、矢田丘陵、吉野や柳生と宿泊遠足をして、「ある時など、どしゃぶりの雨の中を皆で一先懸命に歩いたことも楽しい記憶

として残っている」という。

小学3年からは「母親のすすめもあって」、奈良市内の登大路にあるカトリック奈良教会を拠点とするボーイスカウトに入団する。ボーイスカウトには大学時代までかかることになり、「野外キャンプや奉仕活動などを通して視野が広がったし、自分の人間形成に大きな影響があった気がする」とふり返る。「大倭にせよカトリックにせよ、自他のしあわせを願うという宗教性は変わらない」と感じている。

小学6年生の時に父親の義男さんが急病で亡くなるという大事件が起こる。「次の日の遠足のオヤツを買うための小遣いをもらいに行って、『気をつけて行ってきいよ』と言葉を交わしたのが最後だった」という。「父が亡くなった年齢（48歳）を何とか越えたいという思いがあったが、はるかに越えてしまった」と感無量である。

父親が早世した後には2人の息子を育て上げてくれた母親に対しては、「色々苦労をかけて成人させてもらい感謝の思いしかないし、少しでも長くおおかあちゃんとお過ごせれば」と念じているという。

大学卒業後、「何となく大倭で仕事をするんだらうな」と思い、法主さんに相談した結果、「大倭殖産株式

会社に就職し、営業の仕事に従事して12年間働いた。ただ、「建築業界の営業の仕事は、厳しい競争社会の中で人を押しつけてでも頑張らなくてはいけないという面が強く、自分には向かないと感じつつ、他方ではやりとげられなかったという悔いも残った」という複雑な思いである。

平成17年4月からは社会福祉法人大倭安宿苑に入職し、救護施設・須加宮寮に配置された。

救護施設で18年を過ごし、「かつては滞在型の施設だった救護施設が社会のニーズの変化に対応して通過型の施設に変身しつつあると思う。生活保護法を根拠とする救護施設が施設体系の中では最後のネットワークであることは変わらないが、コロナ禍での変化も含めて時流の流れに対してアンテナをしっかりと張っておかなければ」と痛感している。

「子供の頃から大倭というコミュニティで経験して育ったことが、今の仕事のベースになっていると感じる」とこの頃であると語る。

家庭では2人の娘に恵まれ、「嫁さんが看護師で、また娘達2人も看護師なのが不思議」と嬉しそうである。趣味を聞くと、「特定のものはないけど、体型を見てもらえばわかるように、食べ歩きが趣味かな」と笑う。（聞き手 岸田哲）

あじさい日誌

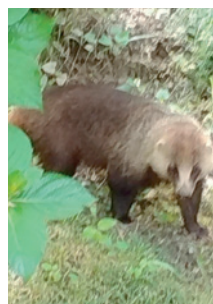
そうです…このタイムミング。6月1日 午後、東方碑の前にタヌキが来ていました。

5月15日 大倭神宮月次祭。

5月21日 京都市内神泉苑等への大倭会文化行事に参加者12名。来月号に報告記事予定。

5月23日 大倭大本宮月次祭。

この日は昭和37年5月23日の法話をお聞きしました。平成18年5月号『おおやまと』に「神ながらの道―基礎的理解のため」として掲載分です。まとめてくれたのは元邑人の上野允士さん(兵庫県神戸市)で、彼の体調を心配していた岸田哲さんが6月5日に電話をすると、昨年にくくなっていたと分かった



6月4日 午前9時から大倭墓

地の掃除が行われました。

6月6日 大倭神宮月次祭。雨のため社務所で行われました。

夜、大倭会館で邑倭の会。

大倭安宿苑では

5月10日 法人成立67周年記念日。今年度もコロナ感染防止の

東光大祭 祭典のご案内

令和5年8月30日(水曜日・旧7月15日)

午前11時30分から、東方の碑で加美さまにご挨拶。

正午から、奥津齋庭において祖霊祭が行われます。

祖霊祭が終わり次第、拜殿に教長さんをお迎えして東光大祭が行われます。

祭典後、皆様各ご家庭の経木をお渡しします。

祖霊祭の間、拜殿では法主様の東光大祭でのご法話や紫陽花邑の記録映像等をご用意します。

【注意】 祖霊祭の経木への書き込み受付は

8月3日まで。あまり日数がないので、お急ぎ下さるようお願い致します。

ため守護神である成謙坊さんへのご挨拶のみとして、式典他合同で集まることは中止としました。各施設毎に行事食でお祝いました。永年勤続表彰は各施設で。

5月17日 本年度JK A(競輪・オートレース関係) 補助事業による長曾根祭特殊浴槽購入に係る入札が行われました。

(菅原園)

5月25日 新緑祭ということ、鉄板で昼食に焼きそばとフランクフルトを、午後からはフレンチトーストを焼き、屋台のような雰囲気を楽しみました。

(須加宮寮)

5月30日 数年ぶりの外出行事で、通天閣・ジャンジャン横丁・ニフレルに出向きました。

(長曾根寮)

5月3日(日) 大きな兜を折り、全員が頭にかぶって記念撮影をしました。

5月5日(特養) 大判の鯉のぼりのイラストと一緒に壁に飾ったり、端午の節句のムード作り。

(茂毛路園)

5月10日 法人成立記念日で、創作料理の昼食でした。

(八重垣園)

5月10日 法人成立記念日を松花堂弁当でお祝いました。

大倭会通信

▼4月23日に行われた令和5年度第1回大倭会幹事会の補足。

NPO法人むすびの家事理事長

である湯浅進顧問からは、前日の4月22日に東大阪市の文化創造館で映画『NAGASHIIMA A』“かくり”の証言』の上映会が盛況であったことや、今年の10月28日(土)〜29日(日)に「むすびの家」コンサートや講演会等を行う予定であることが報告された。また2月23日に天理大学で「架け橋 交流・講演会」祭良県とハンセン病問題」が開催され、交流の家も紹介されたとのこと。

編集後記

▼先日、16年と7ヶ月を一緒に暮らした飼犬の蓮が死んだ。「なんで、いなくなつたんだ」と嘆いては溜息をついている。時には涙も流す。犬を飼っておられない方との温度差は承知しているが、正直、殊の外この身に感えている。

何十年も法主の教えを受けて何を言っているのだと言われても仕方がない。胸に浮かぶのは「諸行無常」の四文字。

実際、蓮には癒され、又様々な事を教えてもらった。現世に生命ある者同士でありがたい様々な交流があった。「転生」という言葉は、人が動物に生まれ変わり、動物が人に生まれ変わる事も指すという。来世があると、私達の命の旅は次に何処へと向かうのだろう。蓮とはもう二度と会えないの

だろうか? それとも会えるのだろうか? そしてその時には立場が入れ替わっているのかもしれないけれど。(林修三)

▼4月号、齊藤麻希さんが寄せてくださった文章にとても感動。校正者という自分の立場を忘れ、彼女の世界にしばし引き込まれてしまいました。彼女の良き理解者「ぎんちゃん」の文章も、法話と響き合う内容でした。

▼5月号、水島照美さんの文章は良かったです。2度も未亡人になって(私は1度やけど)、ある意味大変なのかもやけど、自由に生きておられるのかな? と思って、生き方を羨ましくも感じました。(中村千久佐)

あんない

*月次祭(大倭神宮)

7月6日(木) 午後2時より大倭神宮にて。

*大倭会主催祝会

7月9日(日) 午後2時より大本宮拜殿にて行います。

※8月の祝会は例年通り大掃除祝いです。8月20日(日)でどうぞよろしくお願致します。

*月次祭(大倭神宮)

7月15日(土) 午後2時より大倭神宮にて。

*月次祭(大本宮)

7月23日(日) 午後2時より大倭大本宮拜殿にて。